

かがみやまこきよのにしきえ

加賀見山旧錦絵

〔解説〕

天明二年（一七八二）江戸薩摩外記座初演。容楊黛（ようようたい）作。大名家のお家騒動を題材とした時代物です。「草履打」は実際に武家で起こった事件がもとになっています。お家乗っ取りの一味、局の岩藤（いわふじ）らは、その陰謀を知ってしまった町人出身の中老尾上（おのえ）を執拗に苛めます。草履打ちの辱めから自害してしまう尾上ですが、尾上に仕える女中お初が敵を討ち、お家騒動も解決となります。

あらすじ

〔草履打の段〕

町人の娘ながら重用される中老尾上を妬む岩藤は、町人出身ゆえに武芸の嗜みはなかうと、鶴ヶ岡八幡への代参の折に試合を仕掛けます。岩藤の苛めは更に度を増し、汚れた草履で尾上を打ち据えますが、なんとかその場を堪え忍んだ尾上は、その草履を懷に館への帰路につきます。

〔廊下の段〕尾上に仕える女中のお初は、鶴ヶ岡八幡で尾上が岩藤から辱めを受けたことを他の女中達から聞きます。そこへ岩藤が現れ、尾上憎さからお初をも苛めにかかりますが、ちょうどその時、お家転覆の首謀者弾正

が岩藤のもとを訪れ、お初は岩藤から解放されます。そして、お初は廊下で二人の策略を聞いてしまいます。

〔長局の段〕 鶴ヶ岡での岩藤のいじめに耐えたものの、もはやこれ以上の辱めはないと感じた尾上は、自害を決意してお初を実家への使いに出します。主人の身を案じながらの道すがら、あまりの悪い予感に意を決し文箱の中を見ると、それは遺恨の草履と尾上から両親への遺書でした。慌てて屋敷に戻ったお初でしたが、時すでに遅く、尾上は息絶えていました。お初は尾上が遺した岩藤の密書を手に、主人の仇討ちを誓うのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

草履打の段

勇ましき、かしこき神の神諫め。折から告ぐる供廻り。

「いざ御立ち」

と夕ばえの、中老尾上先に立ち、多くの女中が取囲み、対の帽子も一樣に群れゐる鷺のごとくにて帰り申しの鳥居前。

跡打見やり局岩藤

「ナント尾上殿、町人には珍しいあの善六、町人は賤しいものとモ感心したいまの云ひ様、ヤ、コリヤほんに此様へは差合であつたものホ、ホ、ホ、ヲ、わしとすることがつか／＼と気の毒なホ、ホ、ホ、イヤナニ尾上殿へ、こなさんの宿といふは金持なれど町人、仮親しての御奉公。スリヤ今わしがいふたこと気に障りやしませぬか」

と、味なところへ仕かける意地と、思へどわざとさらさぬ顔。

「これはまた岩藤様の痛み入ります御挨拶。ナンノ私 が左様なこと。が仰つしやる通り親どもがお出入の縁をもちまして、かやうな重い御奉公も有難い身の幸せ。根が町人の私がこと、さぞや不束な事ばかりでござりましよ。この上とても岩藤様、はゞかりながらよい様に、お指図たのみ上げます」

と柳ながしのしなやかに云廻したる利発さよ。

「ヲ、何ぢやえ、町人の娘御故たらはぬ事を指図してくれいかえ、ホンニつべこべつべこべと薄い唇ぢやのう、ナンノお前の御發明で私が指図受けさうな事かいの。

お役向は御中老。この岩藤は局役ヲ、お局役、お表ならば御用人格ぢやぞや。女一通りは勿論、万一狼藉

もの、また盗賊などが忍び入る、サその時は役柄ぢや。

女ながらも御前の固め、討止める器量がなけりや勤らぬ奉公ぢやが、定めて長刀の一手も心得がござらうの。

ヲゝそりやあの、誰に稽古なさったぞ、イヤあの、そのお師匠様は何と云ひますえ。コレ尾上殿々々、エ、マアこな人わいの、人にばかりもの云はせ此方は耳でも潰れたか」

と囁つけられて尾上はただ赤らむ顔を押し隠し

「お恥しい事ながらその心掛けは」

「ないと云ふのか、アノ心掛けはない／＼オホ／＼、皆のものあれ聞きや、重い役を務めながら心掛けはないといの／＼オホ／＼、我折れ、そりやアノ何ぢやぞえ、オ、ほんにこれが禄盗人ぢやヲ、知行盗人ぢや禄盗人ぢや／＼何とさうではあるまいか」

とまくしたてたる雑言を尾上は堪へ／＼ても無念の

涙保ちかね齒を喰しぱり耐へいる。

「ムウ相手にならぬはこの岩藤が恐ろしいのか。ヲ、怖しい筈、道理ぢや／＼そんならモウこりや納めましょ／＼、ドレ／＼帰りましょ／＼、ほんにこなさんにかゝつて、ヲ、コレ見やしゃんせ、足袋も草履も砂まぶれになつたわいな。イヤナニ尾上殿へ、ナントこの草履の汚れたのを拭いて下さんせぬか」

「アノ私に」

「オイノ」

「エ、」

「いやか／＼」

「ぢやと申して、それがマア」

「それがマア、刃物汚しせうよりは幸ひなこの草履」と、足に掛けたる土草履を、尾上が頭テウ／＼。

「これは」

とばかり奥女中、気の毒あまり立騒ぐを尾上は声かけ、

「ア、コレ／＼」騒ぐまい女中達。岩藤様がこの尾

上を御意見のための御打擲、わしや有難うて／＼、母

様の御折檻と思ふてこの身の節々まで有難うて辱け

ない、ホ、／＼、イヤ申し岩藤様、生みの親も及

ばぬ御意見エ、有難う存じます。この上は随分と武

芸をも心掛けて御奉公をいたしませう。また、この草

履は私がためには御教訓のこの一品、申し請けて私が

守り」

と、懷中したる心根は言はぬ色をやいひ草履、胸に納

めし利発さよ。流石の岩藤呆れ顔

「何ぢや、その草履をわしに貰ふて守りに掛ける、ア

ノ、守りにや。テモ恐しい辛抱な人、意見した甲斐が

ある。以後をキツと嗜ましやれ。サ、行きませう／＼、

お暇申さう」

と替草履、心は後に尾上をば、にらみ廻して立帰る。

尾上は跡を打見やり耐へ／＼したため涙、一度にワツ

と伏し転び身も浮くばかり歎きしが、数多の女中が立

寄つて

「コレ／＼申し尾上様、アノ憎体なお局の、氣質は常

からようご存じ、お腹立は御道理なれど、いつもの事

ぢやと思召し必ずお氣にさへられずと、まづ／＼屋敷

へお帰り」

と諫め立つれば泣く／＼も抱へ引締め立上がり、女心

の一筋に、また思ひ出す口惜し涙。早寺々に暮れの鐘。

あすは我が身も消えて行く。夕告げ鳥の泣く／＼も、

打連れ館へ

廊下の段

急ぎ行く。星月夜、鎌倉山に風誘ふ、扇ヶ谷に棟高き、

さき かんれい

前の管領足利家の思ひ人花の方の御館、咲き続きたる

花の御所、盛り十寸見の奥御殿、色香争ふ長局、武家

ますみ

とはいへどなまめかし。夜の憂きを空吹く風と有頂天、
くつたくなしの腰元共、一つ所に寄集まり

「ヲ、お仲女郎、お冬女郎軒から軒の隣部屋も事多

い時は遠々しく、今更いふに及ばねども人目には楽に
見え奉公向のせつろしき。部屋方者と賤いやしまれ奉公

もすることならぬ。皆めんくの肩づくちや。この春

の出代りには、『出て退けふ』と思ふたれどアゝいづ

ちようねん

こも同じ鳥の音色と重年をしたのぢやわいのう。ど

の白壁も同じこと、縁次第ぢや」

はした かしま

とさがな事、口も端の姦しき、

主の噂も鳥影も日脚ものびるハツ下り。お下りのお迎
へとお初がそれと氣も浮かぬ小腰かぐめて

「ヲ、コレハく、皆打寄つてお陸まじい、面白そう

むつ

なお咄し、新参の私故、その仲間へは入れまい、後程
お目に」

と云捨て、御殿をさして行く所を

「ア、コレくお初殿く。そなたもこちらが仲間内、
マアくこゝへ」

と呼びかけられ、嫌ともいはれず惣々の、中へ座れば、
さしでのお仲

「ホンニこなたは仕合せ者じゃ。結構な旦那をとれば

勤めながらも骨は惜まぬ。そなたの旦那尾上様の心よ
し、何から何まで御発明な御生れ、道理こそ育ちが育
ちぢや。お宿というは、このお屋敷の御金御用一式、

親御が勤めやるげなの。人は氏より育ちぢや」

と影口咄しの腰打つてまけぬお冬がつぼく口

「イヤモ気にはかきゃんな、お仲が御主人お局の岩藤様この広い御殿のうち、唯一人お睦まじゅう、相口といふが根つからないぞや。これお初殿、昨日鶴ヶ岡のこと聞いてか」

「イエくわたしは何んにも存じませぬ」

「フーン、そんならマア聞きやいの。お局様と尾上様と御同道で御代参においてなされた所、例のわんざんが出たかして、あらうことかはしたない、御用先で悪口たらぐ。まだその上に大それた、お中老もお勤めなさるゝそなたの御主人尾上様のお髪を、主の草履で叩いたといのふ。堪忍強い尾上様、御代参なりお上の名代、ちつところへてその場は済んで仕もふたげな。が、ナント思やる、かけ構ひのないこちと迄、腹が立ってく夕べは癪が差込んで、お夜食を食べなん

だ」

と苦は色かえる松風の

「評判者ぢや」

と口々にそしる折から奥の間より。立ち出づるは顔も心もすぐならぬ、曲りくねった局岩藤、あたり見廻しくく、

「ヤイく女共、やかましい、そりや何をいふ、次へ行け、行かぬか、立たぬか」

と呵られながら女子共、我が部屋くへ立つて行く。
「ア、コリヤく初、我にはちつと用がある。こゝへ来いく」

「ハイ」

「テ怖い事はないはいのふ。来いと云はゞマ、おぢやいのふ」

「ハイ」

「アノそなたは女子共を集め一端立つて何で人の噂

はなだ

を云ふぞ、サ、なぜ自らが事を悪ふ云やつた、何ぞ意
恨でもあつてか、ただし又尾上殿が悪ふ云へと云ひ付
けたか、サアもちつとこゝへおぢやいのう、どうぢや、
ヤ、サどうぢやいのふ」

と猫などで声も気味悪く、お初は漸ようよふ傍へ寄り

「イヤ私はたつた今参じまして何にも申す間はござ
りませぬ、お赦しなされて下されませ」

と行かんとするを小腕取り

こがいな

「モウくそれで知れた。奥聞ふより口聞けと悪ふ
吐ぬかさぬものを、何赦す事がある。アノ悪根性の尾上
面づら、主が主ならおのれまで悪巧みをしさうな死人女郎めろう
め。仏性なこのわしを、よふもくない事迄拵ひしてへて

なぜ云やがつた、引き裂かれぬ。ドゝゝゝ、ドレ面を
見せいホゝゝゝ、ヲ、よい面ぢやな、テモよい器量

ぢやな」

と傍若無人に引寄せて、詰めつ叩ちやうちやくいつ打擲に、おろ
く涙お初が思ひ『誤りました』も出でばこそ只伏沈
む斗りなり。

「お使者の御入り」

「エ、うぬは仕合せ者、只置くやつではなけれども、
よい時のお使者故ゆるしてくれる。立つて失せい」
と怒りの立ち蹴げ、口惜し涙押隠し、しほくとして立
つて行く。

程も有らせず長廊下、のつかくくと権柄眼けんべいまなこ、出向ふ
岩藤、互にそれと表向き、相口馬あいぐちうまの会釈ほれく

「ヲ、お使者と有るを、どなたかと思へば弾正様、御
苦勞様や」

と互の目遣い。したり顔に上座しやうざに直り

「其以来は打絶へ申した、お使者の趣き余の儀ならず、

『持氏卿御病氣なりと世上へ披露し、御賢息けんそく二方のうち、惣領たる花若殿は花の方の出生成れば、御家督との御内意、申入よ』と後室の御口上、かくの通り』と述べにけり。

「ム、すりや御家督は花若様、これまでいろ／＼と心を尽くせしは仇事か。ホイ」

「テサテ何の案じる事はない、肝心肝文のコレこの継目りんしの綸旨、我らが方に隠し置けば花若の家督相統思ひもよらず。シテ兼ての首尾はいかゞでござる」

「サレバその事、大切なアノ密書いつぞや問註所もんじゅうしよで取落しハツと思ふていろ／＼と捜しても見へぬ密書。尾上めが拾ふたとは鏡にかけてにらんで置いた。スリヤ昨日鶴ヶ岡へ御代参、尾上めを同道。よい折からと思ふた故、立つつ居つに意地悪ふ、どう喧嘩仕かけても

上手遣ふて相手にならず。慮外有つては身の落度とモ流す程に／＼、煮ても焼ても喰はるる様な大体利発な女めではないわいの。詮方尽きて人柄くづし、わしがはいた草履を持つて尾上めを打ぶつて／＼打ちすへ、手向ひさせふと思ふた所、マア聞いて下され。ヤモ恐ろしい奴、それをも辛抱しくさつて手持無沙汰にその場を仕舞ふた。時に尾上めが婢はしたに初といふ奴。又こいつめに手向ひさせ、それから尾上めに付込まふと思ふて今も今とて散々に虐め掛けたが、こいつも又辛抱強い、モ賢いやつ。手向ひ所か誤つてばかり居をつて是も又壺へは行かぬ。この分ならば中々あいつも遠ざける事は成るまい。兼てこちらが巧みの様子氣どつているアノ尾上め、思案が借りたい弾正様」

「ム、テさてしづとい女め、じき／＼の謀はかりごとに乗せらるゝ女ならず。ハテ、どふがな」

と思案の内、襖の影に端のお初、様子窺ひ躊躇ふと

はした

ためろ

も、知らぬ岩藤せゝら笑ひ「ホゝゝゝあの仰山な弾
正様。この家を一呑にと企てるお前やわしが、アノ女
郎一疋が何でそれ程恐ろしいぞ、アリヤ堪忍強いので
も有るまい、真実生れ付いた憶病者。又これからは模
様をかへ、あいつを追出す其思案はお案じなされます
な、これこゝにござります／＼わいな」

「ムゝしからばよきに計らはれよ。きやつめ一人ばい
まくれば」

「ヲ、後は野々宮アノ妾面は心よし、大殿は死んで仕
廻ふ、若殿の小びつちよ殿にあてがいぶちを喰はせて
置けば、この一家中はお前とわしが」

たとえ

「アゝコレ、シ、岩がものいふ世の譬、互の胸たと
えはナア、イヤナニ岩藤殿、吉左右を相待ち申す」と

じぎしきれい

浮べる雲の空頼み、奥と部屋とへ時宜式礼、別れ

長局の段

てこそ入にけり。

跡見送りて襖の蔭、お初がそれと抜き足さし足、あたりを眺め吐息つき

「デモ恐ろしい企みごと、お下がりの遅いゆゑ、どうかかうかと思ひ過ごし、陪者の行くことならぬ奥御殿、往て見やうとは思ふたれど咎められよか叱られうかと、取つて返した襖の蔭、悪局の岩藤殿とアノ伯父御の弾正殿、モだいそれた悪事の相談。コリヤ大切なことぢやわいの、尾上様に申し上げ、お上へのご忠節、アイヤ／＼、証拠も持たず大切なことを生半に、これを訴へてお主様を科に落とし、どのようなご難儀をかける企みの程も知れぬ。わしが大事のお主といふは尾上様よりほかにはない、ヲ、さうぢや／＼」

とひと筋に恩義に迫る主思ひ、待つ間もとけし長廊下、しづ／＼御殿を下がる尾上

神ならぬ身のそれども知らぬお初が物案じ、いく間も遠き長局、部屋の戸開けて内入りも、常に変はりし顔色を悟られまじと癪に紛らし

「正直はさつきにから、持病の痞へが起こつたわいの、夕飯もたべたうない、いつもの通りさすつてたも」

「はい」

とお初が差し寄つて

「先づお枕を遊ばしませ、お風邪召すな」

と搔卷を、甲斐々々しくも、立ち廻り

「お癪の起こるもお道理様ぢや、それにつけても輕い者は奉公とても氣散じに、旦那様やらご家来やら、お友達見るように、お心安うなさつて下さりや、病氣もござりませぬ。その大切なお前様がご病身なをお案じ

申し、どうぞお患ひの出ぬ様にと存じますが、年端もゆかぬ私が口から、ませた事を云ふ小癪者とお叱りもあらうけれど、モとかくに人は氣を晴らし、ものに屈託さへいたさねば、患ひは出ぬものぢやと、巧者なお医者のお申しましたが、そのご養生には物見遊山。アノお前様も芝居は好きでござりませうな」

「ヲ、なるほど芝居は好きぢや、ガ其方も定めて好きぢやあらうの」

「イヤモウくく、好きの段ではござりませぬ、ガそう申すうち、歌舞伎より操り芝居の浄瑠璃が、私は面白うござります」

「ヲ、それなれば話が合ふ、わしもきつい浄瑠璃が好き。しかし、たまぐの宿下がりよりほかは浄瑠璃本で楽しむばかり」

「ハイ私もお屋敷へ上がりませぬその前は、よう見物

に参りました。ガ当たり浄瑠璃も多い中に、アノ忠臣蔵の浄瑠璃ほど、面白いのはござりませぬぞえ」

「ヲ、アノ師直づらの憎さく」

「イヤ申し、お前様のお心には、塩谷殿の師直へ斬りかけられしところは、尤なことに思し召すか、但しまた不了見なことに思し召すかサ、なんと思し召しますえ」

「サレバイノ、ご短慮にはあつたれど遺恨に遺恨を重ねる上はご尤にあろかいの」

「イエくく、憚りながら、ソリヤお前様のご鼻屑口、塩谷殿は大不了見。サなぜと御意あそばせ。大切

な身を軽々しう、短氣にその身を滅し給ひ、親御様のお嘆きハア、ほんに私とした事が粗相な、塩谷殿に親御はないもせぬものヲホ、サなんと思召す。家國を滅ぼし奥様はじめ御家中散りく、たった一人

の不了見が千万人の身にかゝつて、御恩を受けた者どももの歎きのほどは如何ばかりと、思召すぞいのお情ない。ヲ、阿呆らしい、なんのこつちや。拍子にかゝつてお前様へご意見のやうに、ヲ、おかし、ドリヤお菓を見て来う」

と何か詞に綾の糸、勝手へこそは立つて行く。

跡に尾上は胸迫り、忍び涙の涸も瀬も明日はなき名を白紙に、硯の海のそこはかとなき長文も後や先、書き置く筆の命毛も露と消え行く儚さを絶え入るばかり忍び泣き、涙と共に書き留め、革の文箱も浦島が開けて悔しき遺恨の草履。文諸共に文箱の紐引き締めて傍へなる手箱の内を形見わけ、数も涙の玉櫛笥、細々しくも小文庫に思ひ詰めたる憂き涙、包むに余る小風呂敷、中結び締めて玉の緒も、今を限りの空結びに封もしどろにかきくれて、胸に満ちくる血の涙、袖に包み

し思ひなり。

何心なく勝手口、お初は心息せきと煎じ上げたる薬鍋、片手に茶碗携へ出で

「サアお菓」

と差し出だし、見れば包みと文箱にキツと目をつけ

「これはしたり、お心悪いにどこへのお文、お氣が尽きやうに何事」

と問ひかけられてさあらぬ体

「イヤこの文は母様へ急に上げねばならぬ文、この包み大儀ながらつい行てきてたも」

とものがるに、云ひつけられてもぢ／＼と、どうやらすまぬ今日のしだら不精々々に

「アノ参れなら参りませうが、ヲ、アレ、覧ませ、空合ひも曇ってくる。モ勝手がましう思し召しませうが明日のことになされませぬか」

「デモ初としたことが、如何に心安だてとて主の云ひつける宿への使ひ、明日のことにでもせいとは、如何に女子の主なればとて、主の云ひつけを背きやるか」「イエ〜」なんの御意を背きませうぞ。ご持病のお癪も起こり、お顔持ちも悪いゆゑ」

「イ、ヤ癪気はもう癒った、日のたけぬうち早う行きや」

「ハイ」

「早う行きや」

「ハイ」

「何をうじ〜するぞいの、行けと云はゞゆかぬか」

「ハイ只今参りますわいの」

と文箱取り上げ次の間の案じに胸も張葛簞、明けて出したる生木綿の在所染めなる紋付きの部屋方者の一

張羅、帯し直して独り言

「今日に限つてこのお使ひ、モ行きともなうて〜、

尾上様のお身の上が案じられてどうもならぬ。昨日鶴ヶ岡の喧嘩の様子、御殿いっぱいの取沙汰を御存じないか、わしにまでお隠しなさるゝお心の程がどうもわしは案じらるゝ。真実底から大切に思ふお主の大事を、コリヤアノ虫が知らすとやら云ふのか、ア、心許ない〜。ご機嫌に違ふても行たふりしてゆくまいか、アイヤ〜〜どう云ふ急なご用やら知れぬことをさうもなるまい、ヲ、かういう時の仏神様、さうぢや〜」

と塵手水、一心無我の手を合はせ

「南無観音様〜、南無鬼子母神様〜、お宿へ参つて帰りますうち、主人の身の上頼み上げます。ドリヤひと走り走つてかう」

と小棲りゝしく高絡げ、錠口鎖して出でて行く。

影見ゆるまで見送りて、堪へ／＼し胸の内、思はずワツと伏し沈み消え入るばかり歎きしが

やう／＼に顔を上げ

「まだ昨日今日、馴染みもないこのわしを大切に、大恩受けた主人ぢやと年端もゆかぬ心から大事に思ふてくれる志、コリヤ恭いぞよ嬉しいぞよ。岩藤へ遺恨を察し、さつきにも余所事に浄瑠璃の例へを引き、わしが短気な氣も出やうかと云ひ廻したる健氣な利発。今別れたが一生の別れとは知らずして、さぞやとつかは戻つて来て、歎かん事の不便や」

と身も浮くばかりせき上げて前後不覚に歎きしが

「ア、我ながら未練なり、女ながらも武家奉公、草履を持つて面を打たれ、何面目に存らへて人に顔があはされう。とは思へども大切な御前様への忠義を思ひ、今までは存らへしが、この書置に委細の訳。伯父弾正

の悪事の密書、命を捨て、上への忠節。たゞ何事も宿世の約束、最後の晴れの仕度して一遍の経陀羅尼、唱へんもの」

とひと間なる、仏間へさして日も西へ

夕日まばゆき空色も磨き立てたる練堀づくり、足利家の裏門口、文箱抱へ出るお初。形振り見ずに息せきと行くを向ふより二人連れ。何かぶつくさ話し合ひ、来るもお初が心の辻占、行き違ひさま

「ア、叶はぬ／＼モウ叶はぬ、取つて返すがまだしものこと」

「ア、可哀いことをしました」

と聞く辻占にお初が『ハッ』と見やる空にはひと群の止まり鳥の鳴きつれて、最期を告ぐる魂呼ばひ、心細さも身にしみて、歩みもやらず立ち止まり

「ア、氣にかゝる／＼、辻占の今の話、鳥鳴きのこの

悪さ、アレ／＼怪しからぬ胸騒ぎはコリヤお宿へは行かれぬわいの、様子は知れるこの文箱、封じを切つて見てのけう」

と思ひ切つて封押し切り、見れば包みし草履片々、文取り上げて押し開き

「何じや書置の事、コリヤ叶はぬ」

と懷へ、一字も読まず一散に御門の内へと

入相の鐘も無情を告げてゆく、転んづ起きつ廊下口

半狂乱のお初が仰天、部屋の襖も案内なく、ひと間を見ればコハ如何に、血に染つたる尾上が亡骸、抱き上げてたゞうろ／＼

「エ、死なしたり、遅かつた／＼／＼いのう、今ひと足早くばナ、このご最期はさせませぬ、コレ申し尾上様々々々、旦那様」

と呼べど答へも涙よりほかに言葉も泣き沈む。

「笛のクサリを思ひのまゝ搔き切つてござるものを、なんと答へがあるものぞ。ナニ、『御前様御披露』、フムコリヤさつきに窺ひ聞いた岩藤が密書。これさへあればお身の明かりは立つ、ありがたや／＼ナア。コレ申し、ご無念の魂はまだ、まだ家の棟においてなされう、エ、聞こえませぬ／＼／＼わいなあ。昨日鶴ヶ岡で岩藤づらに、草履を以つてお打たれなされたその取沙汰は屋敷いっぱい、ご家来の私が身で、口惜しうあるまいか無念にはあるまいかいなう。女にこそ生れたれ、私も武士の娘、ご尊憤を晴らしかねうか。追付け仇岩藤が首引下げて御無念を晴らせませう、コレ必ずお待ち遊ばせ」

と遺恨の草履、手に取り上げて打ち眺め／＼無念の涙血を注ぎ、凝り固まりし烈女の一念、義女のその名を末の世に錦と替はる麻の衣、女鏡と知られけり。

夜もはや初夜を告げてゆく、ご夜詰触れの音冴えて、
鉄行灯の光りさへいと淋しき長局、胸撫で下ろし手
を組んで、思ひ詰めたるその眼色。氣も張り弓の三日
月も入るさの影の暗紛れ。手水鉢に差し寄つて、柄杓
持つ手もワナ／＼と、掬ひ上げたる水ひと口。恨みの
草履。片手には血汐滴る尾上が懷劍。片手片足の早寝
刃。庭の千草に鳴き告ぐる蛙の声も物凄し、辺り見廻
し奥の間へ、真一文字に駆けり行く。忠臣義女の道広
く、館を差して出でて行く。

